

# 六花

RIKIWA

9

俳句雑誌りつか  
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno



山田六甲

さくら

こん  
今

焼酎に香たきしめてあふらむか

壬生祭のかんでんがんでんかんでんでん

乳ぜりてはさかあがりする藤の虻

能をふむ足袋美しや藤の風

片脚をのびしてみする雨蛙

藤棚に酔うて一日をたのしみぬ

山藤にすすれる卵かけ御飯

つばな野やさざなみのやうに人歩き

ひな芥子に吾はほろりとかぼれけり

お姉さま青い揚羽が来てゐます

あめんぼの足かけて雲輝けり

壬生狂言

住吉神社四句

シルク温泉

大中遺跡五句

すいれんの息饒えみたる水の朝

木霊して清明塚の時鳥

安倍晴明塚

亀鳴くと道満塚の細下り

蘆屋道満塚

さざ波を離れて来たる風みどり

寺田池五句

春落葉ある方へ道わかれあり

ほととぎすヲノコマチとなきにけり

土手越えて水風の来る燕子花

幼虫にまた来てゐたる夏のでふ

半反の刈り残されし麦の秋

印南平野

蛍の飛ぶ夜は包ばおのしのび声

草山温泉

雪嶺抄

雪の橋

笹村 政子

雪の橋わたりきつたる背負しよい子こかな  
雪原に影を落せる鳶一羽  
雪原の涯や裾野に村十戸  
雪原に這へば遠嶺は母の顔  
捨雪の砦なしたる養父郡  
山影の山駆け上る雪の原  
足跡の雪の中洲をわたりあり  
さざ波を鯉のにじませ雪解川  
春雪や円山川の倒れ藪  
泥靴の人を待ちをり忘れ雪

# 雪卿集

柳の芽

松本文一郎

寒月や坂道長き影上る  
鈴の緒やガラスに映る春浅き  
春寒や走り根止めし石畳  
鶏小屋のトタンの捲れ春北風  
柳の芽地に届かむとふくらみぬ

紙風船

佐津のぼる

子の息に吹き口濡れて紙風船  
三鬼忌や女医に口中のぞかれて  
パンを焼くにほひが町に涅槃西風  
群れ発ちて一羽の高し春かもめ  
花房に羽音縮めて蜂の来る

# 雪卿集

余生

志方章子

裏道に入れば水仙花ざかり  
春めくや雀とみれば松ぼくり  
貝合はせの姫も殿御も春の夢  
春禽に間の抜けし声まじりをり  
余生かな白き梅より紅き梅

鉛筆

永田万年青

百色の鉛筆貫ふ入学生  
春の草瓦礫に混ざる鉛筆よ  
鉛筆を折りては削る春の宵  
玄関に俯きみたる紙雛  
春暁や湖北を分かつ舟の水脈

# 如月や線路のそばの小さき墓

赤松有馬守破天龍正義

きんぎょやせんろのそばのちさきはか あかまつありまのかみはてんりゅうまさよし

如月や線路のそばの小さき墓

命懸けに酒呑む漢鴨の宿

座禅草月よりの使者思ひけり

春落暉比良山上より慈母の湖

春そこに鶴舞ひ降りる湖北かな

「如月」は西行が「その望月のころ」と詠った釈迦入滅の月であり、墓では即きすぎ、と思われるかも知れないが、線路の方に注目したい。線路は文字通り旅人が行き交う道。西行も旅人だった。芭蕉も旅人だった。この墓は子どもを葬った墓かも知れぬ。人生の旅をする前に死んでいった子どもだけだと切ないが「あわれ」などと材料に凭れた主情の言葉は使わず、如月、小さき墓、線路を提示だけして微妙に響き合わせているのが光る。私は取り合わせの句を評価しないが、この「如月」は冒頭で言ったことを含むのでよしとする。

# 修正の利く鉛筆や春の風

米沢 美幸

修正の利く鉛筆や春の風

啓蟄や鉛筆一本あれば良い

鉛筆に似たる土筆の伸びにけり

延々と癒えぬ病や春隣

久々に外に出づれば日差し春

しゅうせいのきくえんぴつやはるのかぜ よねざわ みゆき

鉛筆の本質（修正が利く）を突いた。この句の「春」は今限りの春でなく、何年も何十年も繰り返して再びめぐってきた「春の風」。その春風に作者は懐古を含めて、過去の幾度かの岐路の選択が間違っていたのか、これで良かったのか、とあれこれ考えて居る。その岐路に立ち返って、鉛筆で書いた文字のように修正が利くのならよかつたのになあ、という感慨を深めているのだ。鉛筆の芯が折れたとか、などと云わず、精神的に鉛筆を描いたこの句には修正など不要である。



# 雪樹集

春の鳶

藤生不二男

みづうみに沖のありけり春の鳶  
雛唄の昏みかけたる軒端かな  
雛の客酔うて日暮を帰りけり  
残雪や鯉の重なる養父郡  
春灯のほろりほろりと女身かな

花の道

溝渕弘志

春雨に包まれた駅帰宅せり  
春の雪窓辺の花を消しにけり  
池に落つなほ盛んなり藪椿  
いつせいに見詰められたる花の道  
また今年母校の庭に花吹雪

# 蛩雪譚

六甲選

※調子は効果的に破れ、

二十七年六月号鑑賞

俳句を思い切り吐き出さないと次の書が読めないし、読んでも頭に入つて来ない。私は読書の最中にあれこれ句の連想ばかりして文字が入つてこないことが多い。それはそれで幸せだどつくづく思う。此処に取り上げる一句一句を温泉に浸りながら夜空を見上げる。どう考えても解釈できない句については作者は何を言いたいのだろうか？と親切心が涌くが、「選句は不親切でなければいけない」と反省する。評もしかし。叱ってもらえる人がいないことは孤独である。世間の評価ばかり気にする俳人も居るが、それは孤独と言うより寂しい人。自作の評価を期待できるのは六花ではこの場である。評価をしてもらえない主宰はあくまでも「木鶏たち」と「孤独を楽しみ遊ぶ。先般入院している友達に会った。個室の扉は開けてあった。そつと入っていくと、彼はじつと下を向いている。声を掛けるまで身じろぎもせず、何かを祈っているようであった。彼に与えられたたつた一つの窓には、かつて彼が勤めていた新緑の童王城温泉跡が今はホテルになっている。私が彼の立場になつたとき、波風の過ぎた、静かな日々を送ることが果たして出来るだろうか。ペンもメモも持たず思索をめぐらすことが出来るだろうか。彼はぼつりと「俳句をつづけているのか」と訊いた。その言葉を「反芻しながら主宰として孤独でも、優秀な弟子が沢山居る幸せな自分がいた。」

## 雪の橋わたりきつたる背負子かな

笹村 政子

焦点を背負子にしつかり絞って詠んである。雪がずつしり積もった橋の危うさも見えてくる。橋の途中で滑ったり足が纏れて川に落ちる可能性だつてあつたのだ。ハラハラして見ていたが、無事渡りきつた。雪の橋の危うさを「渡りきつたる」で想像させる。おそらく背負子には薪か、雪の中から掘り出した冬野菜が大根であろう。それを背負うと重心が高くなつて不安定な歩き方になる。が長年深雪に暮らしてきた人だからおぼつかない動きながら渡りきつたのだ。それを見定めた作者の安堵も伝わってくる。



六花集

五月号



平居 濤子  
冴返る手擦れの聖書輪読す  
誰それに似しと涅槃図囲みけり  
残雪の比良のつきくる湖西線  
前奏にしては激しき雪解川  
花辛夷白き伊吹と向ひ合ふ

大内 幸子  
遺されし日を手抜きもし初音聞く  
雪解川先を競ひて波がしら  
またしても体調くづし燕来る  
ずつしりと合格通知梅の庭  
投函はいつも畦径別れ霜

秋田 典子  
画用紙にくりくり目玉のひひなかな  
雛売場一目惚れして見る値札  
梅一輪香り届かぬメールかな  
貝の殻混じる若布を洗ひをり  
鮎子<sup>いかなど</sup>を炊くだけの鍋出しにけり